

平成 31 年度

---

---

小 論 文

---

---

10 : 00 ~ 11 : 30

地 域 社 会 学 科  
(推 薦)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら受験番号を解答用紙の指定の欄に記入下さい。
3. この冊子は4ページあります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出下さい。
4. 解答用紙は2枚入っていますが、1枚は清書用、もう1枚は下書き用に使い下さい。提出は清書用1枚だけです。
5. 設問は3問あります。
6. 解答は横書きで書き下さい。
7. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってさしつかえありません。

設問 次の課題文を読み、下の問に答えなさい(問で指定された字数は、いずれも句読点を含む数字です)。

【課題文】

……「社会変革」という言葉を使うとき、これまで社会理論は誤った認識をもっていた<sup>①</sup>のではないかと私は思っている。社会科学的な理論では、社会のなかに矛盾が高まり、その矛盾が変革をうながしたととらえられてきた。だがそれは社会の構造的理解にすぎない。つまりこのとらえ方は、なぜ人びとは社会を変えようとしたのかという変革主体の意識を認識していないのである。

歴史を振り返ると、人間たちは何度か大きな変革のために起ちあがっている。ところがその時期は、必ずしも社会の矛盾が最高潮に高まったときということでもないのである。矛盾が高まっているのに大きな変革が起こらないときもあるし、逆に、相対的にはそれまでよりも矛盾が深まったとは思えないのに改革運動が広がったときもある。さらに述べれば、そのとき改革のために行動した人たちが矛盾のただ中にいた人とはかぎらない。むしろ矛盾からまぬがれていた人たちが前面に出てくることが、例外ではなく発生している。マルクスの時代をみても、一部の貴族やブルジョアジーが闘争の先頭に立ったり、比較的安定した基盤をもっていた職人や当時の知識層の人たちが数多く参加していた。

構造的矛盾の問題と変革主体の形成とは、必ずしも調和していない。とすると、何が変革への動機になっていたのであろうか。私はそれは「飽きる」ということだと思っている。これまでの秩序のもとでの生き方に飽きた人びと、その人たちが新しい生き方を可能とする社会をつくろうとした。

人間の意識は、必ずしも科学的根拠によってつくられるわけではない。哲学はその意識をとらえようとして、これまでも直感、直観とか深層意識、基層意識、絶対精神、自我等々のさまざまな言葉を使ってきたが、そう感じるがゆえにそう思うとしかいいようのないものが、意識の奥には存在している。

変革の動機も同じだ。言葉にすれば、この状態に飽きたがゆえに新しい生き方を可能にする社会が作りた、そうとしか言いようのないかたちで、人間たちはときに変革を求める。そしてその時代を後になって分析すれば、ある種の矛盾の高まりがそれをうながしたと考察できる。

今日の時代には、これまでの秩序のもとでの生き方に飽きている人たちが、大量に生まれてきているのである。だからたとえば非正規雇用の問題でも、非正規雇用がふえたから運動が広がる、というわけではない。大量の非正規雇用を生みだしながら展開する社会のもとでの生き方に飽きた人びとが新しい生き方を探しはじめたとき、それが新しい活動や試みを生み出した。

たとえばいま地方にいくと、どこにいても大都市からの移住者たちが暮らしている。その多くは若者たちが、自分たちが志した仕事を創造しはじめている。その人たちと地元の人びとが結びあっているところでは、新しい地域の活気も生まれはじめているが、その移住者たちは都市で仕事がなかったがゆえに地方に流れてきたわけではない。都市でも十分に暮らせる人たちがほとんどである。

にもかかわらず移住してきた。なぜなのか。これまでとは違う生き方をつくりだそうとして、である。それは自然と結び合う生き方であったり、コミュニティとともに生きる生き方や農山漁村を基盤にするからこそ可能なクリエイティブな生き方であったりする。だから最近では農村にデザイン工房を開いたり、農村を基盤にした都市のネットワークをつくる人たちも数多く見受けられるようになってきた。<sup>②</sup>

(中略)

それは、世界的な動きだといってもかまわないと私は思っている。今日とは市場経済や国民国家、個人の社会としての市民社会という近代以降の構造が限界を示しはじめた時代であり、この構造のなかで生きることには飽きた人びと、限界感を感じる人々がふえている時代でもある。

だがその時代には、これまでの秩序を維持しようとする人びともまた強固に結集する。その人たちが日本では静かな政権支持勢力をつくりだす。そしてときにはこれまでのかたちを堅持したい人びとによる利益共同体が形成される。あるいは今日のEUなどでおこっているように、この土壌から外国人排斥運動が広がったりもするし、自国の利益以外は顧みない人たちも生まれてくる。その根底にあるものは変わることへの恐怖なのだから、変革への動きが高まれば高まるほど、それを拒否しようとする動きも強固になっていくだろう。

(中略)

人びとが変革を求めはじめている時代には、さまざまな動きが渦巻く。だが今日の日本の変革の動きをみるなら、ひとつの方向性が生まれつつあるように感じられる。

それは一言でいえば、「ともに生きる社会」、「ともに生きる経済」をつくりだそうとする動きである。市場経済のなかで勝ち負けを争うのではなく、やりがいのある仕事を支え合いながらつくりだしていこうという動きであり、結び合う社会の再創造であり、自然とともに生きる社会をめざす動きが、社会の水面下で多様な動きをみせているのであり、その人たちが求めているものは、市場経済や国家のシステムに縛られた生き方から、それぞれが生きる場をもっているような生き方への変更だと言ってもよい。そしてこの方向性を共有しながら、コミュニティづくりやソーシャル・ビジネスづくり、地方への移住などが展開しているのが現在である。

とするとこの動きは、明治以降の近代化に対する新たな抵抗でもあるのだろう。明治以降の日本では国家や市場経済の役割が拡大し、いまではこのシステムに従属するかたちでしか私たちは存在することができなくなった。

だが現在では、国家も市場経済も、さらには個人の社会としての市民社会も限界を<sup>③</sup>あらわにしている。ゆえにこの限界を超えようとするとき、より強大な国家や経済システムをつくるのではなく、それぞれの生きる場の再創造をとおして、強大なシステムに人間が従属する時代からの解放をめざす、そういう動きが現在の社会の奥では、雨後の筍のごとくおこってきているのである。強大なシステムをつくっていった時代から、システムを虚無化していく時代へと変えていく。そういう方向性をみせながら今日の変革運動が進んでいるとするなら、それは明治以降の歴史に対する抵抗でもあり、またそれが一過性の運動で終了することもないだろう。

大きくは近代世界の行き詰まりという世界史的現実がある。その過程のなかでは、これまでの秩序のもとで生きることにも飽きた人びとと、その秩序を変えたくない人びととがでてくる。だが変えたくないといっても、その秩序は限界にきているのである。だから秩序を維持したい人たちは、維持のために「改革」をしなければならなくなる。そこからより徹底した市場原理主義や、より強大な国家をめざす動きなども生まれてくる。……

世界史的な過渡期を見据えながら、今日のさまざまな動きをとらえていく。私たちはそのような視野を必要とする時代を生きている。

(出典：内山節「崩れゆく市場と国家の秩序からの解放 それぞれの“生きる場”を求めて」、『世界』2015年12月号より作成。)

問 1 下線部①について。「[社会変革]という言葉を使うとき、これまで社会理論は誤った認識をもっていた」と筆者は考えている。筆者はなぜそう考えているのか説明しなさい。(100字以内)

問 2 下線部②について。「農村を基盤にした都市のネットワークをつくる」とは具体的にどういうことか。あなたの知っている事例、またはあなたが考えたことから一つあげなさい。なお必要なら、「農村」を「農山漁村」に、「都市」を「都市住民」と読み替えてもかまわない。(100字以内)

問 3 下線部③について。「だが現在では、国家も市場経済も、さらには個人の社会としての市民社会も限界をあらわにしている」とある。その限界を超えるために筆者はどのような道筋を描いているか、必ず「飽き」という言葉を入れて(「飽き」「飽きる」「飽きた」「飽きて」などのうち、最低一つを使えばよい)、まとめなさい。

その上で筆者の描く道筋について、あなたは「否定的にとらえる(反対)」か、「どちらともいえない」か、「肯定的にとらえる(賛成)」か、を明らかにし、そうあなたが考える理由を論述しなさい。(600字以内)